９．武道授業における伝統的な「礼法」の探索的検討

兵庫教育大学　有山　篤利
兵庫県播磨高校　竹内友季子
京都教育大学　籔根　敏和
立命館大学　山下　秋二

キーワード：礼法、武道、体育、伝統文化

９．The exploratory study of traditional "etiquette" in martial arts classes

Atsutoshi ARIYAMA (Hyogo University of Teacher Education)
Yukiko TAKEUCHI (Hyogo-ken Harima High School)
Toshikazu YABUNE (Kyoto University of Education)
Shuji YAMASHITA (Ritsumeikan University)

Key words : etiquette, material arts, physical education, traditional culture

Abstract

The purpose of this research is to explain, with reference to the concept of civility, the details of the etiquette learned during martial arts classes. For this research, after consideration of the concept of civility as it originated in China, the warrior etiquette of the Ogasawara-ryū was used as a basis for developing a questionnaire on etiquette in martial arts classes. A survey was then administered, and its results enabled an “etiquette learning scale” consisting of three factors (“awareness of others”, “importance attached to efficiency” and “situationally appropriate judgement”) and 22 questions to be constructed. Gains in learning such that mastery was achieved suggested that this scale was an effective evaluation tool.

抄録

本研究の目的は、礼という概念を踏まえながら、武道授業における礼法の学習内容を明らかにすることにある。研究にあたっては、礼という中国で生まれた概念について検討したうえで、武家礼法としての小笠原流礼法を参考にしながら、武道学習における礼法についての質問紙を作成し、調査を行った。その結果、「他者意識」、「効率性の重視」、「状況に合わせた判断」の３因子と22の質問項目からなる「礼法習得尺度」を構成することができた。また、学習経験の豊富な者ほど習得度が向上することから、それらの評価指標としての有効性が示唆された。

１．研究の発端

武道は、武技・武術と呼ばれた戦技の流れを受け継ぐ我が国のスポーツ文化である。それは、単なる格闘「術」の体系にとどまらず、「道」と呼ばれるある種の思想体系を含む身体文化として発展してきたところに大きな特徴がある。この点について、湯浅（2011）は、「実践」としての武術は、そこから抽出された「わざ」としての「芸」の習得・洗練それ自体に価値を見出すようになり、武術の「武芸化」という文化的価値を創造し、「武道」が「わざ」や「芸」という文化的価値の追求を通して自己の心身のあり方を求めるという、「自己修養」という教育システムをも包含するものへと変質したと述べている。

現代の武道の輪郭は、1987年に日本武道協会が定めた武道憲章によって規定されている。その前文及び第１条に、このような文章が明記されている（日本武道館，2007）。

「武道は、日本古来の勝負の精神に由来し、（中略）、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修行道・鍛錬法として洗練され発展してきた。このような武道の特性は今日に継承され、旺盛な活力と精神な気風の源泉として日本人の人格形成に少なからざる役割を果たしている。（後略）。」

「武道は、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする」

この文章にみられるとおり、現代の武道において「術」の錬磨は、あくまでも人格を磨くための筋道であり、その主眼は「人間形成」にありという主張を掲げている。そして、この武道の掲げる目的を学校教育のなかにひきとる形で、現在の教科体育における武道授業は成立している。

2017年３月に新しい中学校学習指導要領が告示されたが、前回の学習指導要領に引き続いて、武道の学習内容のひとつに「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること」が明記された（文部科学省，2017a）。そして、その具体的中身については、「単に伝統的な行動の仕方を所作として守るだけではなく、『礼に始まり礼に終わる』などの伝統的な行動の仕方を自らの意思で大切にしようとする」ことであり、「伝統的な行動の仕方を守ることで、自分で自分を律する克己の心に触れることにつながることを理解し、取り組めるようにする」こと、及び「伝統的な行動の仕方の指導については、単に形の指導に終わるのではなく、相手を尊重する気持ちを込めて行うことが大切であることに留意する。」こととされている（文部科学省，2017b）。これは、武道が目指す人間形成を、「伝統的な行動の仕方」の学習を通じて達成しようとするもので、その「伝統的な行動の仕方」は「礼に始まり礼に終わる」という行動様式、すなわち「礼法」に象徴されることを表わしている。すなわち、武道の伝統性は、人間形成を通して「礼法」に集約されているのである。

確かに、武道は、古来、武士が習練した武技・武術との間に歴史的な継続性があり、それらに自己修養的な価値観が伝統として含まれていたことは間違いない事実である。しかし、武道の伝統性を安易に「礼法」に集約することに対しては批判の声もある。例えば、中村（2007）は、「礼法」について、相手を尊重する姿勢や公正な態度の重要性は説明されているが、具体的な「行動の仕方」との結びつきは何一つ示されていないと述べている。また、有山ほか（2015）は、学習指導要領が示す「礼法」には、「克己の心」や「相手への尊重」など汎用的な道徳的価値観が関連づけられているだけで、そこに自国の伝統とのつながりを示すような論拠がみられないことを指摘している[注1]。

永木（2008）は、武道を、武力としての「術」が必要でなくなった時代に、それを消滅させようとする外圧（欧化主義等）に抵抗し、さらにはそのような潮流を乗り越えようとして「理論武装」あるいは戦略的な「適応」を図った運動文化として捉えている。中村や有山ほかが指摘したように、学習指導要領が示す「礼法」に具体性や伝統の裏付けが不足している背景には、近代化とともに衰退の危機にあった武道を自国の文化として保存継承するために、その自己修養的価値観を近代教育的に読み替える行為を戦略的に行ったという側面があったのではないだろうか。このことを承知の上で、武道を伝統文化の教材として体育学習に位置付けようとするならば、人間形成とのつながりにおいて単純に理解されている「礼法」と自国の伝統との関係については、今一度論理的な整理が必要であると考える。

2．研究の目的

新しい学習指導要領においても、「礼法」は武道の人間形成機能を介して我が国の伝統と結び付けられている。しかし、これまで見てきたように、現在、「礼法」と伝統とを結びつける概念は「克己心」や「相手への尊重」など汎用的な道徳的価値観であり、それは特に伝統と呼べるほどローカルなものではない。また、「礼法」を示すものと思われる「礼に始まり礼に終わる」などの「伝統的な行動の仕方」が、具体的にどのような行動の様式を示すのかは記述されていない。よって、末次（2009）が「礼〈お辞儀〉をするという動作のみが重視され、その形式的な部分にこだわることに教育的価値があると捉えられている」と指摘するように、現在の武道授業では、単に「試合や練習の前後にお辞儀をさせること」が自国の伝統の学習のように解釈され、指導されているのが実情である。

そこで、本研究では、「礼法」を方向づける「礼」という概念を踏まえ、我が国の武家礼法である小笠原流を参考にしながら、「伝統的な行動の仕方」としての「礼法」の内容を推定するとともに、武道授業における習得度を実際の行動として測定できる「礼法習得尺度」の構成を試みることとする。

3．「礼法」の概念的検討

3－1　用語の整理

尺度を構成するための手続きとして、伝統的な「礼法」に関して用語の整理をしておく必要がある。本研究においては、区別が曖昧なまま使用されている「礼」と「礼法」の関係を明確にしておきたい。

「礼」は元来古代中国において生まれた考え方であり、「礼法」という行動様式に方向性を与える概念として把握する。小笠原（2010, p.30）が、孔子は論語のなかであらゆる物事の根本を「礼」

に求めるという論理を展開しているが、日本人はこれを理論としてよりも行動として発展させていった、と述べている。したがって、我が国の「礼法」は、あくまでも「礼」という考え方をもとにした具体の行動の仕方をあらわしており、それは我が国で独自に形成された行動様式として理解できよう。

よって、本研究においては、「礼」を中国で生まれた一定のベクトルをもった概念として捉え、「礼法」はその「礼」という概念が具体化された行動様式と位置づけて今後の検討を進めることとする。

3－2　古代中国における「礼」

「礼」は古代中国において神や先祖に関連した祭祀にまつわる文字であり、旧字体において「禮」と書かれるように、神を表わす「示」と祭器をあらわす「豊」からなっている（下見, 1973）。古代中国においては、万物の生成は天の法則としての陰陽五行[注2]説によって説明され、この陰陽五行による天の法則に従って天を敬うことが「礼」であった（石川, 2003）。末次・猪越（2013）によれば、社会が発展するにつれ、「礼」は異なる背景をもつ人々が調和し、一つの国で共存するための「国家秩序を維持するために人々が守らねばならない概念」として位置づけられるようになり、孔子の時代になって、それは人と人との関係に密接に関わり始めるようになったと指摘している。狩野（2015）は、孔子の「礼」が人間のとるべき行動のきまりをあらわしており、人は「礼」に則った行動の意味を理解しつつ、納得して自ら従うことが重要であると考えられていたと述べている。すなわち、中国で生まれた「礼」は、本来、「天と人」あるいは「人と人」の関係において「調和」をつくりだす法則であり、現代社会で重視されるような汎用的な道徳やマナーを表象するような概念ではなかったといえる。

「礼」の歴史的背景の探求は本論の趣旨から逸脱するため、これ以上の深い検討は控えるが、中国における「礼」は、森羅万象あらゆる事物の関係を調和させる法則であり、具体的には陰と陽のように異なる性質の組み合わせにより調和的関係を築こうとする考え方であった。竹田（2002）は、このように性質の違うものを組み合わせて調和世界を組み上げる考え方は、「相反相成」[注3]とよばれる中国の伝統的な基本概念の一つであると述べ、中国の古代武術もその影響を受け、陰と陽、虚と実、速と遅、動と静など対立する動きを組み合わせ、その変化規律を規範化することによって指導が行われていることを指摘している。

3－3　我が国における「礼法」

「礼」という概念が我が国に伝来したのは、応神天皇の時代にもたらされた「論語」によると推測されている（狩野, 2015, p.4）。我が国にもたらされた「礼」は、敬神、崇祖、尊王の心をもつ皇室祭祀から始まっており、604年に発布された「十七条の憲法」には「礼」が政治の中核に位置づけられていることが看取できるという（小笠原, 2010）。

（第一条）
一に曰く、和を以て貴しとなし、忤うこと無きを宗とせよ。（以下略）
（第四条）
四に曰く。群卿百寮、礼を以て本とせよ。其れ民を治むるの本は、要ず礼に在り。
上礼あらざれば、下斉わず、下礼なければ、必ず罪あり。是を以て、群臣礼あるときは

位次乱れず、百姓礼あれば、国家自から治る。

これは、「和」を根本に位置付けながら、その「和」を実現する具体的な行動規範として「礼」を守ることの重要性を述べたものである。その後、「礼」は、貴族が身につけるべき教養としての有職故実にまとめられるとともに、朝廷礼式に用いられるようになる。すなわち、我が国の「礼法」は、中国における「天と人」あるいは「人と人」の関係において「調和」つくりだす法則である「礼」という概念を取り込みながら、貴族・公家（後には武家）社会の調和をつくりだすための制度や儀式、服装、官職に関する行動等を規定する様式として具体化されたものと言えよう。小笠原（2010, pp.32-44）も、我が国の「礼法」が、中国の「礼」という概念に強く影響を受けて発達し、我が国において社会生活を送るうえでの作法、すなわち、動作の様々な約束事として整備されたことを指摘している。

やがて、時代は公家から武家社会へと移行し、武士は貴族から奪った特権意識を誇示するために、その行動規範の中に「礼法」を取り込んだ「武家礼法」を確立する。「武家礼法」には、弓馬術（屋外礼法）に関する小笠原流と、殿中作法（屋内礼法）に関する伊勢流に大別されるが、なかでも小笠原流は鎌倉から江戸までの武家社会の公式礼法（小笠原, 2015）として現代まで継承されている。したがって、我が国の伝統文化として「礼法」を問うならば、この小笠原流「礼法」というものを踏まえる必要がある。

結論から言うならば、小笠原流が伝える「礼法」は、現代人が理解しているような「挨拶」の仕方とは明確な区別が必要である。小笠原（2015）は、小笠原流礼法が、鎌倉時代から江戸時代に至る「武士の嗜み」であり、「弓術、弓馬術も基本は礼法にある」と述べ、世間の人が誤解しているような煩わしい抹消にこだわる形式主義とは隔絶されたものであり、その基本は「立つ、座る、歩く、お辞儀をする、物を持つ、回る」という基本動作において、正しい姿勢を意識し、頸と腰をしっかりと支持できる身体を鍛錬しておくことにあると強調している。すなわち、伝統的な「礼法」には、武士が戦士としての機能を維持あるいは鍛錬するために必要な身体鍛錬としての側面があると言うのである。

小笠原流にとって「礼法」は、試合前後のお辞儀やエチケットとしての挨拶ではなく、あくまでも戦時を想定しながら、「いつ、どのような状況におかれようと対応できる実用的な身体の操作法」を日常の所作として組み上げ、そのなかに「礼」という概念の美意識を位置付けたものと理解されている。そのコンセプトは、「実用・省略・美」というキーワードで簡潔にあらわされるが、これは、「礼」を「実用」という現実の場に供するのが「礼法」であり、そのためには不合理で無駄な動きを「省略」することにより、「礼」にかなった所作としての「美」が生まれるという考え方を象徴した語であると考えられる（小笠原, 2015, pp.64-69）。繰り返しになるが、「礼」は「（陰陽のように）異なる性質の組み合わせにより調和的な関係を組み上げようとする」概念であり、「礼法」はこの美意識に基づいて実生活に調和をもたらすための行動の様式であった。そして、武士達はこの「礼法」を自らの特殊スキルである武技・武術のなかに取り込んで発展させたと言える。

現代の武道授業における「礼法」に「克己の心」や「相手への尊敬」などの道徳的価値観を期待することについては、武道の修養主義的性格を現代教育のなかに体現するという意味において、その価値を否定されるものではない。しかし、現行の学習指導要領に記述されているように、武道授業の「礼法」に伝統文化の内容を期待するならば、少なくとも、小笠原流礼法に看取できる

ような伝統性を具現化して学習の中に位置付けることが必要であると考える。よって、本研究では、武道授業における我が国の伝統的な礼法を検討するために、現代的な「礼法」ではなく、古来より伝わる小笠原流礼法を対象にした調査をもとにして、武道授業において学ぶべき伝統的な行動様式としての「礼法」を検討することする。

4．尺度を構成するための調査

4－1　予備調査の実施

はじめに、伝統的な「礼法」の指導を体験的に理解するとともに、尺度作成に向けた概念操作を行うための情報収集を目的に、平成28年６月～10月にかけてK市内で行われた同流教場における稽古会にて参与観察を行うこととした。稽古会は、毎月第４土曜日に開催されるものであり、指導を受けた概要は表１の通りである。稽古会には同流31世宗家に直接知識を教授いただくとともに、同流修行者に対し自由記述式の質問紙調査をあわせて行った。自由記述式の調査は、平成28年７月及び８月にK市N神社教場で行われた稽古会にて行われ、当日参加した20代～60代の男性11名、女性６名、合計17名に協力を得た。質問事項は、①武道を行う上で最も大切にしている考え方や行動の仕方、②学校体育で指導すべきであると考える礼法、の２点である。

表１　参与観察時の稽古内容

期　日	稽古時間	稽古内容
平成 28 年 6 月 25 日	3 h	①礼法の基本的な動き ②お焼香の仕方，他 （宗家より直接指導を受ける）
平成 28 年 7 月 23 日	4 h	①礼法の基本的な動き ②着物の着脱の仕方，畳紙の扱い方 （聞き取り調査・質問紙調査の実施）
平成 28 年 8 月 27 日	5 h	①礼法の基本的な動き ②熨斗の折り方，水引のつくり方，他 （聞き取り調査・質問紙調査の実施）
平成 28 年 9 月 19 日	3 h	①礼法の基本的な動き ②萩まつりの段取りと稽古
平成 28 年 10 月 29 日	7 h	①礼法の基本的な動き ②七五三の段取りと稽古

4－2　概念の操作化

自由記述式の質問紙調査によって得られたテキストデータ及び参与観察や聞き取りによって得られた情報をもとに、武道授業における「礼法」の定着度を評価するための概念操作を試みた。検討にあたっては、（１）小笠原流礼法に関して、（２）武道（柔道・剣道）に関して、（３）体育科教育（武道領域）に関して、（４）尺度作成に関して、（５）国語表記に関して、の５項目のいずれかに専門知識があることを条件に、５名の礼法修行者・研究者・教員等を選定した。

はじめに、「礼法」の定着度を把握するために必要な仮説的構成概念を開発することとした。小笠原流に関する基本知識を踏まえたうえで、回答の共通性に注目しながらテキストデータ及び聞き取り調査の情報を検討した結果、その内容は、①「臨機応変性」、②「セルフコントロール」、③「実用性・機能性」、④「同調の意識」の４つに分類することが可能と判断した。①「臨機応変性」とは、時や場所に応じた行動や状況に合わせた自分の立場を常に意識することの重要性を

示唆する内容である。②「セルフコントロール」とは、呼吸の仕方など自らの何気ない身体動作を常に律しておくことの重要性を示唆する内容である。③「実用性・機能性」とは、常に無駄な動きを省くとともに機能的で合理的な身体操作や物の扱いをすることの重要性を示唆する内容である。④「同調の意識」とは、周囲の人の動きを意識し協調した動きをすることの重要性を示唆する内容である。この４つの内容を、武道授業における「礼法」の学習内容を探索するための仮説的構成概念として採用することとした。

小笠原（2015, pp.64-69）は、先に述べたとおり、その「礼法」の要諦を「実用・省略・美」とあらわすとともに、その基本は「正しい姿勢の自覚」、「筋肉の働きに反しない」、「物の機能を大切にする」、「環境や相手に対する自分の位置（間柄や間）を常に考える」の４点にあると述べており、抽出された仮説的構成概念もおおよそこれに従った内容となっており、その妥当性は十分にあるものと判断した。

これらの過程を経たうえで、高橋ほか（2003）の体育の授業場面の観察カテゴリーに従って、武道の学習を「マネジメント」、「学習指導」、「認知学習」、「運動学習」の４つに分類し、４つの仮説的構成概念に基づきながら、それぞれの場面における具体の行動を33の質問項目として設定した（表２）。

表２

仮説的構成概念	学習場面	インディケータ	質問項目
臨機応変性	マネジメント	準備・片付け	1. 準備・片付けをする時は，状況をよく見て，手薄なところや困っている仲間を手伝うようにしている
		上座・下座	2. 整列をする時は，常に上座・下座を意識しようとしている
	学習指導	要点のメモ	3. 先生が説明・演示する時には，大切なことや要点を聞き逃さないように，メモしたり，写真や動画を撮ったりしている
		周囲への配慮	4. 説明・演示・指示がわかりやすいように，周囲に気を配るようにしている
	認知学習	仲間のフォロー	5. 仲間の元気がない時には，励ましたりフォローしたりしている
		役割の発見	6. 仲間同士の活動では，状況や雰囲気に応じた役割を見つけようとしている
	運動学習	安全への配慮	7. 安全を考え，人とぶつからないように，いつも周囲に気を配るようにしている
		気配の察知	8. 相手と向い合った時は，いつも相手の気配を読もうとしている
セルフコントロール	マネジメント	学習の準備	9. 先生が前に立つと，静かにしようとしている
	学習指導	集中した姿勢	10. 先生の説明・演示・指示には，私語したり，よそ見したりしないようにしている
		姿勢の保持	11. 先生の説明・演示・指示の時には，常に姿勢を正しくするよう気をつけている
	認知学習	雰囲気のコントロール	12. 仲間同士の活動では，活動や話し合いが盛り上がりすぎたり，夢中になりすぎたりしないように，冷静さを失わないようにしている
		言動への気遣い	13. 仲間同士の活動では，仲間の影響を考えて発言したり行動したりするように気をつけている
	運動学習	闘志のコントロール	14. 激しい攻防では，冷静になるようにしている
		正の感情のコントロール	15. 勝った時は，ガッツポーズをしたり，はしゃいだりするところを見せないようにしている
		興奮の抑制	16. 攻防前後に気分が高まったり，緊張したりしても，落ち着くようにしている
		負の感情のコントロール	17. 負けた時は，悔しくても騒いだり，落ち込んだりしないようにしている
		気持ちの鼓舞	18. 気持ちがひるんだ時は，奮い立たせるようにしている
実用性・機能性	マネジメント	稽古着の扱い	19. 稽古着や袴を丁寧にたたむようにしている
		稽古着の着用	20. 動きやすいように，いつも稽古着や防具を正しく着用しようとしている

	学習指導	聴取り姿勢の工夫	21. 先生が演示する時には，見聞きしやすい場所に移動したり，姿勢を工夫したりしている
	認知学習	資料の整理	22. 学習が効率よく進むように，学習カードや資料をまとめたり整理したりするようにしている
		立ち位置の工夫	23. 仲間と活動する時には，効率よく学習が進むように，立つ位置や座る場所を工夫するようにしている
	運動学習	自然体	24. 肩に力を入れず，自然体ですっと立つようにしている
		形の遵守	25. おじぎをする時には，形式や正しい動作をしっかりと守ろうとしている
同調の意識	マネジメント	教員との同調	26. 授業開始・終了時のあいさつは，先生の礼に動作を合わせるようにしている
		美しい整列	27. 整列する時は，まっすぐ並べるように，いつも周囲の立つ位置に気を配るようにしている
		周囲との同調	28. みんなと一緒に立ったり座ったりする時は，周囲の人の動作のタイミングや呼吸に合わせるようにしている
	学習指導	指示への反応	29. 先生の指示・発問に対して，自然に反応したり返事したりしている
		アイコンタクト	30. 先生の指示・発問がある時には，いつも目を見るようにしている
	認知学習	作業ペースの配分	31. 話し合いや学習カードに記入する時は，他のグループや仲間のペースに合わせるようにしている
		円滑な意思疎通	32. 仲間が話す時には，相づちを打とうとしている
	運動学習	おじぎの呼吸	33. おじぎをする時は，相手のタイミングや呼吸に合わせようとしている

4－3　本調査の実施と手続き

作成された33の質問項目をもとに、武道授業における「礼法」の習得度を評価する尺度を構成するために、以下の手続きによって質問紙調査を実施した。

質問紙は、①フェイスシート（性別・年齢・武道または礼法の経験年数・段位）、②作成された33の質問項目によって構成されている。②については、４段階リッカート尺度（いつもしている・ときどきしている・あまりしていない・全くしていない）により回答を求めた。

調査対象は、「礼法」を習得していることが期待できる弓馬術礼法小笠原流（以下、小笠原流）の修行者、柔道高段者、剣道高段者を対象にした。その詳細な内訳は表３のとおりである。小笠原流修行者については、稽古が行われている教場において集団面接法により回答を得た。また、一部の修行者に対しては、代表者を通じて質問紙を配布し回答を取りまとめ、郵送にて回収した。柔道高段者については、H県柔道連盟の指導者講習会において集団面接法により回答を得るとともに、郵送法を用いて公的機関や大学等の団体代表者に用紙を配布し、集団面接法にて回答を得た。剣道高段者については、H県剣道連盟の稽古会において集団面接法により回答を得るとともに、公的機関や道場の代表者へ手渡しで用紙を配布し、集団面接法にて回答を得た。

調査は、平成28年９月～10月に行われ、285名中239名（84.9％）の有効な回答を得た。なお、質問項目は、学校の武道授業を想定して作成したため、一般成人の修行者の行動にそのままあてはめにくい項目が一部あることが予想された。そのため、調査者あるいは各団体の代表者が調査を実施する前に、「日常において、調査対象者自身が意識している行動の基準を質問のケースに当てはめて回答」するように補足説明を行った。

また、調査にあたっては、調査対象者に研究の趣旨や守秘義務等について十分に説明し、承諾を得たうえで回答を得ることとした。

表３　調査対象者

	有効回答数／全回答数	平均年齢	平均継続年数	平均段位
小笠原流礼法修業者	28／28	52.8	39.0	
柔道高段者	138／152	52.4	39.1	5.5
剣道高段者	73／104	51.2	38.8	6.2
合計	239／285	52.1	39.0	5.9

4－4　統計処理

得点については、最も肯定的な回答を４点、最も否定的な回答を１点として４段階で換算した。はじめに、各項目の標準偏差を求め、全ての項目の回答に偏向傾向がないことを確認したうえで、３ ～ ６の範囲で因子数を指定し、探索的因子分析（主因子法，promax回転）を繰り返し実施した。その後、因子負荷量が.40以上を基準に、解釈可能性を検討することによって尺度における因子の抽出を試みた。そのうえで、構造方程式モデリングにより因子分析モデルの適合度を検証した。適合度指標には、GFI、AGFI、CFI、RMSEAを採用した。また、尺度の信頼性については、内的一貫性を検証するためCronbachのα係数を算出することとした。

加えて、今回の調査によって特定された「礼法」の内容が、学習内容として習得可能なものであるのかを検討するために、「礼法」の習得度得点と武道の経験年数の関連を検討することとした。調査対象者の小笠原流・柔道・剣道の経験年数の中央値を算出し、中央値以上の群と未満の群に分類したうえで、それぞれの「礼法」の習得度得点ならびに下位尺度得点の平均点を比較した（$p<.05$）。

なお、以上の統計処理には、SPSS Statistics ver.19及びAMOS ver.23を使用した。

５．結果と考察

５－１　因子構造の抽出と因子の命名

はじめに、小笠原流の修行者及び柔道高段者、剣道高段者239名のデータについて、標準偏差を求めたところ、すべて1.0以下となった。よって、データには極端な偏向傾向のないことが確認された。

そのうえで、得られたデータに対し探索的因子分析（主因子法，promax回転）を実施し、因子の抽出を試みたところ、３因子が最も妥当であると判断した。その際、因子の内的妥当性を確保するために、因子負荷量が.40未満の項目及び弁別性の低いと思われる項目、因子の解釈上不適当と判断した項目を削除した22項目を採用した。その後、因子数３として再度探索的因子分析を実施した結果、すべての項目において因子負荷量.40以上を示し、先の因子に従属した単純構造を示した（表４）。

第１因子については、33.「おじぎをする時は、相手のタイミングや呼吸に合わせるようにしている」や、28.「みんなと一緒に立ったり座ったりする時は、周囲の人の動作のタイミングや呼吸に合わせるようにしている」など９項目で構成されている。これらは、自分が行動を起こそうとする際に周囲の人や場の状況を素早く察知し、それらに配慮した行動をとることの重要性を示す項目であると解釈できるため、「他者意識」と命名した。

第２因子については、22.「学習が効率よく進むように、学習カードや資料をまとめたり整理したりするようにしている」や３.「先生が説明・演示をする時には、大切なことや要点を聞き逃さないように、メモしたり、写真や動画を撮ったりしている」など、８項目で構成されている。

これらは、無駄な力を用いないで済むように作業の効率化を図り、機能的に行動することの重要性を示す項目であると解釈できるため、「効率性の重視」と命名した。

第３因子については、21.「先生が演示する時には、見聞きしやすい場所に移動したり、姿勢を工夫したりしている」、29.「先生の指示・発問に対して、自然に反応したり返事したりしている」など５項目で構成されている。これらは、固定的なやり方や考え方にとらわれるのではなく、その場や状況に合わせた適切な方法を選択することの重要性を示す項目であると解釈できるため、「状況に合わせた判断」と命名した。

表４　「礼法」の習得度を評価する因子行列パターン（ｎ＝239）

	番号	インディケータ	因子負荷量	M	SD	Cronbach の α 係数	
他者意識	33	おじぎの呼吸	.79	3.67	.54	.85	.72
	25	形の遵守	.71	3.88	.34		
	28	周囲との同調	.69	3.60	.56		
	11	姿勢の保持	.68	3.59	.59		
	24	自然体	.62	3.66	.56		
	20	稽古着の着用	.59	3.89	.33		
	2	上座・下座	.55	3.81	.46		
	27	美しい整列	.55	3.83	.42		
	17	負の感情のコントロール	.53	3.31	.74		
効率性の重視	22	資料の整理	.82	2.58	.87	.84	
	31	作業ペースの配分	.75	2.71	.85		
	3	要点のメモ	.61	2.68	.91		
	23	立ち位置の工夫	.57	3.38	.72		
	13	言動への気遣い	.56	3.46	.62		
	12	雰囲気のコントロール	.53	3.18	.75		
	6	役割の発見	.47	3.36	.65		
	32	円滑な意思疎通	.44	3.13	.76		
状況に合わせた判断	21	聴取り姿勢の工夫	.76	3.78	.46	.78	
	29	指示への反応	.70	3.53	.63		
	10	集中した姿勢	.69	3.85	.38		
	1	準備・片付け	.45	3.59	.56		
	5	仲間のフォロー	.43	3.37	.66		

５－２　因子分析モデルの適合度

探索的因子分析によって得られた因子分析モデルをもとに、当該モデルの適合度について構造方程式モデリングを用いて検証した。

その結果、GFIについては.85となり、やや低めではあるがモデルの採択基準は満たしているものと判断した。またAGFIの値は.817となりGFIとの差は僅かであった。また、CFIの値については.88となりやや低めではあるが、RMSEAの値については.07となり採択基準を満たしていた。よって、適合度を判断する４つの指標は総合的に採択基準を満たしていると判断し、本研究の因子分析モデル（３因子、22項目）はおおむねデータに適合していることが明らかとなった（図１）

５－３　内的一貫性の検証

各因子の内的一貫性を検証するため、Cronbachのα係数を算出したところ、「他者意識」因子において.72、「効率性の重視」因子において.85、「状況に合わせた判断」因子において.78となり、

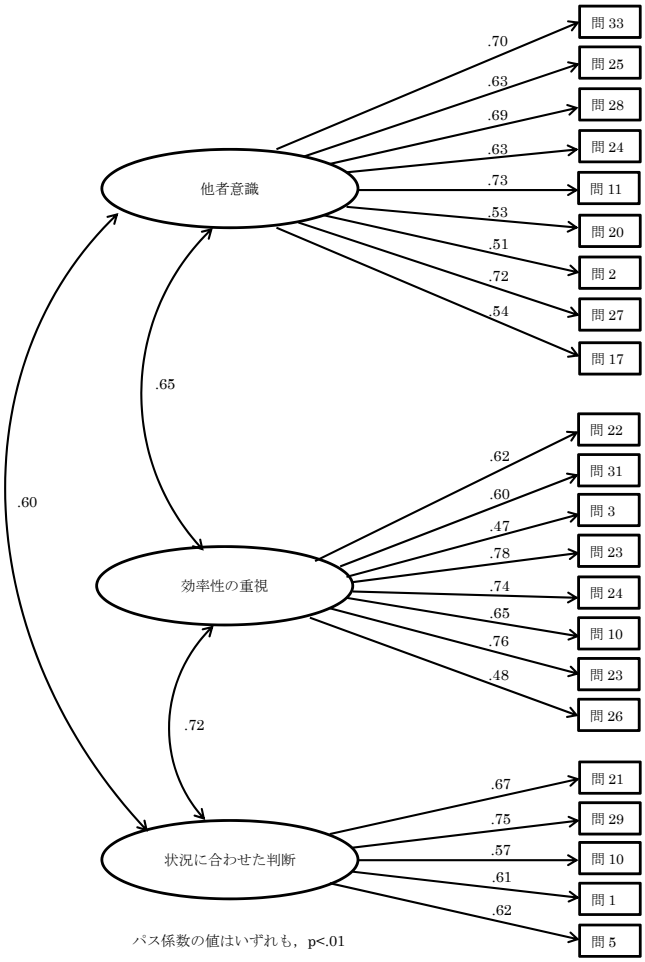

図1　構造方程式モデリングによる因子分析モデルの検証結果（n＝239）

３因子全体では.72の数値を得た。いずれの数値においても.70以上の数値を得ており、よって内的一貫性は確保されているものと判断した。

5－4　武道経験年数が「礼法」の習得度に及ぼす影響

武道授業における伝統的な礼法の習得度を評価するために本尺度が有効であるかどうかを検討するために、小笠原流及び柔道・剣道の経験年数（以下、武道の経験年数と記す）が「礼法」の習得度得点及び下位尺度得点に及ぼす影響を検討することとした。

はじめに、武道の経験年数の中央値（28.5年）を基準として、中央値以上の経験年数群と中央値未満の経験年数群の２群に分割した。中央値以上の経験年数群は157人（64.9％）、中央値未満の経験年数群は85人（35.1％）であった。両群について、「礼法」の習得度得点及び下位尺度得点の平均点をT検定（p>.05）により比較したところ、「礼法」の習得度得点（t＝2.83, df＝240, p<.01）、及びその下位尺度「他者意識」（t＝3.01, df＝240, p<.01）、「効率性の重視」（t＝2.49, df＝240, p<.05）において、中央値以上の経験年数群の定着度が有意に高いという結果を得た。「状

況に合わせた判断」（t＝1.05, df＝240, n.s.）については有意な差がなかった（図２）。

以上の結果より、今回明らかにした「礼法」に関する尺度項目は、総合的にみて武道を長く経験することによって向上する傾向があることが明らかとなった。

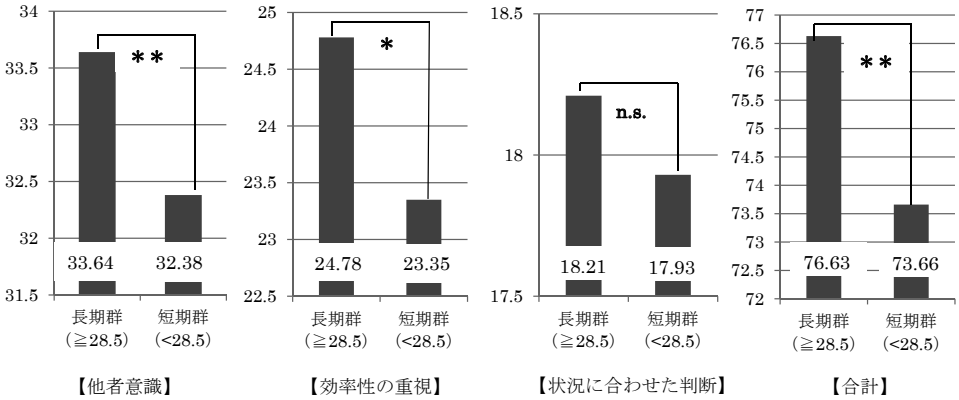

図２　「礼法」習得度得点における武道経験年数の比較

５−５　結果の考察

これまで武道授業においては､「試合や練習の前後に､形式を守ってお辞儀をさせること」が「礼法」の一般的な指導として行われてきたが、我が国の伝統文化という背景から「礼法」を検討した結果、これまで我々がイメージしてきたものとは異なる「礼法」の姿が明らかとなった。

まず、武道授業においては、学習中の言動すべてに「他者意識」を有していなければならない。これは、武道としてみれば、常に「気配を読む」という身体的スキルへとつながる所作・振る舞いである。周囲の状況や相手の様子を察することが、伝統的な「礼法」として礼儀正しさの基本にあり、それは同時に「技」の基本でもある。必然的に、武道授業における試合や稽古前後のお辞儀は、形式を正しく守らせること以上に、相手との呼吸やタイミングを合わせることがその要諦とならねばならない。そしてそれは、そのまま、武道の「技」の基本として認識する必要があろう。

また、学習中は常に「効率性の重視」を意識し、無駄のない動きを心がけることが、「礼法」にかなう行動となる。具体的には、学習中に指導者の話のポイントを聞き逃さない工夫をしたり、グループ活動において機能的や役割分担をしたりすることそのものが、「礼法」に含まれることを意味している。誤解のないように申し添えるが、これは近代的な道徳的態度の涵養とは異なる論理である。結果として、それは、指導者に対する敬意や仲間との協力等の道徳的態度として感得されるのであるが、あくまでも「動きの無駄を省く」ことが武道の「技」の基本にあり、「効率性の重視」という行動様式を身体化することに主眼がおかれる。嘉納治五郎が自身の創始した柔道の解説として、「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である」と述べ（嘉納、1915)、効率のよい無駄のない身体の使い方を主張するのも、まさにこの文脈に則った考え方ではないだろうか。

次に、「状況に合わせた判断」については、現在武道授業で行われているように「決められた所作や作法」を守ることが、伝統的な「礼法」の本質ではないということを表わしている。もちろん、ベースとなる定型が存在し、それを習得することは重要ではあるが、「礼法」にとってより大切な要素は、それを状況に合わせて臨機応変に応用していくことにある。そのための起点が

「他者意識」であり、その動きのベクトルが「効率性の重視」ということになるだろうか。定型的な「礼法」の指導のみに終るならば、それは単なる形式の学習であり、伝統的な「礼法」の本質を大きく損なうこととなる。有山・山下（2015）は、我が国の武道でいう「柔能く剛を制す」の定義を、「充実した力同士の衝突を回避するように臨機応変自在に変化する」こととし、その臨機応変な変化に重要な意味を見出しているが、このことは、伝統的な「礼法」と武道の「技」の原理との共通性を表わすものとして興味深い。

また、武道経験年数が、「礼法」の習得度得点及び３つの下位尺度得点に与える影響を検討した結果、「状況に合わせた判断」以外のすべての平均点において、経験年数の長い群が有意に高いという結果を得た。これは、今回作成した「礼法習得尺度」は、修行経験の長さ、すなわち学習量の多寡によって違いが出ることを意味しており、本尺度が武道授業における評価の指標として有効である可能性を示唆するものと考える。今回の調査においては、すべて一定の熟達者を対象にしたために、「状況に合わせた判断」については差が出なかったが、未熟達者や未経験者との比較を行えばその傾向はより明瞭になるものと考える。今回明らかにされた伝統的な「礼法」の内容は、学習によって習得可能な身体技法である。

６．まとめ

本研究においては、武道授業で学ぶべき伝統的な「礼法」の学習内容を検討し、「他者意識」、「効率性の重視」、「状況に合わせた判断」の３因子と22の質問項目からなる「礼法習得尺度」を構成することができた。伝統的な「礼法」とは、現代人が理解しているような人と人とが交わす挨拶のみを意味するものではなく、ましてや、試合や稽古の前後のお辞儀に限定されるものではなかった。小笠原流礼法の言葉を借りるならば、「実用・省略・美」という価値観をベースにした所作や振る舞いを武道の学習中の行動として組み上げることにある。そして、それは武道の「技」の学習へとつながりをもって発展するものでなければならない。安易な推測については慎重にならねばならないが、「礼に始まり礼に終る」の真意は、「正しいお辞儀をして、正しいお辞儀で終る」という表面的な意味のほかに、武道の技能はすべからく「礼法」にかなったものでなくてはならず、武道の技能体系は「礼法」に始まり「礼法」に帰する、という意味を有しているようにも思われる。このことについては、この場で安易な断定をすることなく、今後さらに詳細な研究が必要と考えるが、少なくとも、武道の「技」との関連を無視したまま「礼法」を汎用的な道徳的価値観の涵養として位置づける態度は、「礼法」に伝統性を求めるという現在の学習指導要領の方向性に対して矛盾をはらんでいることは間違いない。

平成29年に告示された新しい学習指導要領では、教科の学習内容を、①知識･技能、②思考力･判断力・表現力等、③学びに向かう力、人間性の３つに整理した。これは体育も同様であり、武道授業においてもこの３つの力の育成がなされねばならない。また、同時に、新しい学習指導要領においても武道領域には伝統文化を学習する内容が期待されており、「礼法」はその象徴として取り扱われている。これは、武道授業における「礼法」の学習を、グローバル化が進む現代において、日本人が日本人であり続けるための教養として再編する必要がある事を意味している。このことを踏まえるならば、今回明らかになった伝統的な「礼法」の学習を構成する「他者意識」、「効率性の重視」、「状況に合わせた判断」は、①知識･技能として武道の「技」に関わる内容であり、同時に、②思考力・判断力・表現力等や、③学びに向かう力、人間性に関連して、日本人が伝統的に用いる課題解決の方法、あるいは日本人がよしとする人間像に結びつく内容ではないだろう

か。本研究が目指した「伝統的な行動の仕方」としての「礼法」の内容の推定と、それに基づく「礼法習得尺度」の構成は、新しい学習指導要領が目指す自国文化を学ぶ武道授業にとって重要な示唆を含むものと考える。

注

（1）中村（2007）や有山（2015）の指摘は、平成20年改訂の学習指導要領に示された内容に基づくが、今回示された新しい学習指導要領においても、「礼法」に関して具体的な「伝統的な行動の仕方」は示されていない。

（2）万物の化成は相反する性質をもつ、陰と陽の２種の気の消長によるものとする陰陽説と、万物が天地の間に循環流行して停息しない木火土金水の５つの元気によって組成されるという五行説を組み合わせたもの（岩波書店，1998）。

（3）「互いに反しながら互いに成り立たせ合う」関係であり、「互いに矛盾があり相反しているが、一定の条件下では整合性があって発展の要因になる」という中国の伝統的な考え方。

引用・参考文献

・有山篤利・山下秋二（2015）教科体育における柔道の学習内容とその学びの構造に関する検討．体育科教育学研究，31（1）：pp.1-16.
・石川英昭（2003）中国古代礼法思想の研究．創文社
・岩波書店（1998）広辞苑第5版
・宇野直禎（2015）60分で名著解読論語．凸版印刷，pp.247-249.
・嘉納治五郎（1915）講道館柔道概説．柔道，1（2）．柔道会本部，pp.5-6.
・文部科学省（2017a）中学校学習指導要領
・文部科学省（2017b）中学校学習指導要領解説保健体育編
・永木耕介（2008）嘉納柔道思想の継承と変容．風間書房，p.44.
・中村民雄（2007）『今，なぜ武道か』．ベースボールマガジン社，p.352.
・日本武道館（2007）日本の武道．ベースボールマガジン社，pp.8-9.
・小笠原清基（2015）小笠原流美しい大人のふるまい．日本実業出版社，pp.2-3.
・小笠原清忠（2010）武道の礼法．ベースボールマガジン社，pp.33-35.
・小笠原清忠（2015）小笠原流の伝書読む．日本武道館，pp.64-69.
・下見隆雄（1973）中国古典新書礼記．明徳出版社，p.9.
・末次美樹（2009）武道における礼の教育的価値－礼の本質論についての研究－．駒澤大学総合教育研究部紀要，3：pp.305-325.
・末次美樹・猪越悠介（2013）武道における礼の概念－古代中国に成立した礼の考察－．駒澤大学総合教育研究部紀要，7：pp.665-674.
・湯浅晃（2001）武道伝書を讀む．日本武道館，pp.43-45.

追記

本研究は、2016年度笹川スポーツ財団「笹川スポーツ研究助成」を活用して得られた知見をもとに作成されたものである。また、本研究にあたっては礼法弓術弓馬術小笠原流31世宗家小笠原清忠先生はじめ、同流門人の皆様に多大なる御示唆と御協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。